

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT
2015.9. VOL.28

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

加速化する高大連携！—医学研究科における取り組み—

「高大連携」とは、高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携です。狭義には“大学における学修を高校の単位として認定する制度”を指しますが、広義には“高校と大学の連携のもと行なわれる教育活動”と考えられています。

「十分な能力・意欲のある高校生が大学レベルの教育研究に触れることができる取り組み」として、科目履修生や聴講生として大学の授業科目を受講する、大学が実施する公開講座を受講する、大学教員が「出前講座」などの講義や実験実習等を行なう、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)等の大学と連携した取り組みを実施する、などが高大連携として加速化し、全国で実践されています。

医学研究科においても、名古屋市立の小中高校への出前授業、“教えて博士なぜゼミナール”を10年以上前から実施しており、また約10年前からSSH企画として向陽高校の熱意ある希望者に対し、夏休み期の2-3日間「研究室体験実習」を実施してきました。

昨年2014年から、本企画を名古屋市立高校(菊里高校、向陽高校、桜台高校、名東高校)の希望者への「研究室体験学習」へと拡大し、7研究室に分かれ31名の高校生と12名の高校教員が参加しました。本年は、医学研究科の8研究室(脳神経生理学、病態病理学、細菌学、法医学、環境労働衛生学、遺伝子制御学、分子毒性学、再生医学)に加え、薬学研究科とシステム自然科学研究科も加わり、計15研究室において30名強の市立高校生と、のべ30名の高校教員が研究体験を行いました。

来年度からは、不育症の研究拠点として国で初めて文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」に認定されたのを契機に、『高校生のためのHands on seminar「遺伝子変異の見つけ方」』を企画した産婦人科教室も「研究室体験学習」に新たに加わります。

ますます加速化する高大連携！ 医学研究科では、高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携の強化を進めております。

文責:脳神経生理学 教授 飛田 秀樹



研究室体験実習の様子



動物を用いた実験の様子



高校生のためのHands on seminarの様子

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院・教育

連携病院 —名古屋市立東部医療センター・西部医療センター—

名古屋市立病院では「患者さんと職員の笑顔がみられる病院」を理念に、救急医療、小児・周産期医療など、政策的な医療に積極的に取り組むとともに、がん、心臓血管疾患、脳血管疾患等の高度・専門医療を中心に医療機能の充実強化を図り、市民が安心して適切な医療を受けることができるように努めています。

東部医療センターは、365日24時間患者を受け入れる「断らない救急」を目指した救急医療や、心臓血管疾患、脳血管疾患、内視鏡下手術などの高度専門医療に取り組み、質の高い急性期医療を提供しております。また、平成27年3月には救急・外来棟を開棟し、更なる高度医療の充実を図っています。

西部医療センターは、平成23年5月に運営を開始し、小児・周産期医療や、がん医療、脊椎疾患などの専門医療・救急医療の提供を行っており、平成25年2月からは、陽子線治療センターで、最新技術を導入した治療装置による身体的負担が少ないがん治療を開始しています。

学生実習については、平成27年度からM6選択制臨床実習マニュアルの見直しを行い、東部医療センターと西部医療センターの診療科を複合的に選択できるようにしました。このことにより、実習生が東部医療センター、西部医療センターの2病院それぞれの特色のある診療科を効率よく、集中して体験することが可能となるとともに、テーマを持ってより深い実習を行えるよう6ターム長期実践コースと、従来の実習形態に準じた2ターム短期集中コースも新設しました。

また、東部医療センターでは3タームを実習期間とする19の選択コースも新設し、救急の流れや、症例等に関連付けて東部医療センターの診療科を実習することも可能となりました。

このように、それぞれの病院の得意とする領域等を自由に組み合わせローテーションすることで、充実した臨床実習を行うことができるようになったと考えております。もちろん、従来どおりの1タームの実習や、それ以外の短期間実習も可能ですので、ぜひ、名古屋市立東部医療センター・西部医療センターで多くのことを学んでいただければと願っております。



東部医療センター外観



東部医療センターハイブリッド手術室

名古屋市病院局長 山田 和雄



西部医療センター外観



西部医療センターリニアック室



西部医療センターNICU



Sakurai Keita

櫻井 圭太(さくらい けいた) 放射線医学分野(講師)

専門:神経放射線診断学、認知症・神経変性疾患の画像診断、脳脊髄液漏出の画像診断

人口の高齢化と共に認知症の症例数は増加し、世界的な問題となりつつあります。認知症は“treatable dementia”である正常圧水頭症から神経変性疾患であるアルツハイマー病、前頭側頭葉変性症など様々な病態を内包しており、正確な診断がマネジメントに欠かせません。近年、画像診断技術の進歩により、従来は困難であった微細な萎縮、血流、代謝の変化が評価可能となりました。画像統計解析をはじめとした診断技術を応用することにより、認知症の病態把握における画像診断の貢献度は確実に増えています。私は、一般では入手困難な病理診断例を用いて、講演、論文発表や画像コンサルタントなどの活動を積極的に行っています。

近年の論文:Annals of Nuclear Medicine 29: 206-213 (2015), Neuroimage; Clinical 7: 605-610 (2014), Insights Imaging 5: 375-385 (2014), Cephalalgia 32: 1131-1139 (2012), Neurology 75: 1730-1734 (2010)



Narita Tomoko

成田 朋子(なりた ともこ) 血液・腫瘍内科学分野(病院助教)

専門:リンパ系腫瘍(分子標的薬、抗体療法)

医学部入学前から、血液内科の道を志し、がんの勉強をして参りました。おかげで、壁にぶつかったときも、ぶれない心で粘り強く前へ進むことができました。現在も、先輩や後輩、そして患者さんの協力を得ながら、基礎研究および臨床研究を行っています。多発性骨髄腫の分野では、染色体異常の予後因子に関する全国調査や分子標的薬の治療効果を予測するバイオマーカーの検討を行っています。成人T細胞性白血病(ATL)の分野では、HLA拘束性におけるHTLV-1抗原特異的免疫応答の検討やATLモデルマウスの作成およびこれを用いた新規治療薬の開発への取り組みを行っています。

近年の論文:Blood Cancer Journal 5:e285 (2015), The Journal of Immunology 192:940-947 (2014), The Journal of Immunology 191: 135-144 (2013)



Sugiura Tokio

杉浦 時雄(すぎうら ときお) 新生児・小児医学分野(助教)

専門:小児肝臓、新生児

黄疸の中でも直接ビリルビンが高値を示す胆汁うっ滞を研究テーマにしています。胆汁うっ滞を来す病気は稀ですが、原因が多岐にわたり、診断・治療に苦慮します。現在は、大学院生の先生と次世代シークエンサーを用いて網羅的遺伝子解析を行っています。胆道閉鎖を否定するためには、開腹手術をしないといけません。今後、お腹を開けなくても診断できるような新しいシステムをつくっていきたいと考えています。また、B型肝炎ウイルスやヒトT細胞白血病ウイルスの母子感染率を下げるための臨床研究も行っています。故・杉山幸八郎先生、故・後藤健之先生の遺産を、次世代の若い先生につないでいくことが亡き師匠への恩返しになると思っています。

近年の論文:Transfusion Medicine;25:42-46 (2015), European Journal of Pediatrics;173:1541-1544 (2014), European Journal of Pediatric Surgery Reports;1:43-45 (2013), Journal of Perinatology;1:79-82 (2013), Pediatric Neurology;47:35-39 (2012)



Murakami Shuko

村上 周子(むらかみ しゅうこ) 病態医科学・ウイルス学分野(特任助教)

専門:肝炎ウイルス、細胞生物学、生殖内分泌学

B型肝炎ウイルス(HBV)は、一度感染すると完全排除が難しいウイルスです。感染経路には、出産時に母子間で感染する垂直感染と、体液を介した水平感染があり、垂直感染は感染防止事業の実施により新たな感染者数は激減しましたが、HBワクチンを接種していない一般集団では、性行為など水平感染によるB型急性肝炎が現在も年間約2,500人と推定されます。特に、慢性化しやすい欧米型の遺伝子型AのHBV感染例が若年成人の間で増えつつあり、感染防止策は急務です。最近、私たちはヒト肝細胞キメラマウスによる試験を行い、遺伝子型C由来の国産ワクチンが遺伝子型Aに対しても感染予防効果を有することを確認しました。この成果も含めた共同研究により、平成27年1月に我が国でも0歳児を対象としたHBワクチンのユニバーサルワクチネーション導入の方針が決定され、予防効果が期待されます。社会への貢献をめざして基礎研究に日々取り組んでおります。

近年の論文:Hepatology 2015 in press, Immunity 42: 123-132 (2015), PLOS ONE 10: e0118062 (2015), Journal of Hepatology 63: 546-553 (2015), Hepatology Research 44: 1208-1216 (2014)

新任教授のご紹介

腫瘍・免疫外科学分野 — 中西 良一 教授

この度、平成27年5月1日付で病態外科学講座腫瘍・免疫外科学分野教授を拝命致しました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は九州の大分に生まれ、産業医科大学を昭和60年に卒業後、同大学講師を経た後、国家公務員共済組合連合会新小倉病院で16年勤め、九州を初めて出て名古屋に参りました。その間、診療部部長や副院長として7年間病院管理者や医療安全室長を兼務し、医師会理事として地域医療連携にも携わって参りました。

これまでに約1,800例の胸腔鏡手術を行い、肺癌における同手術のシェアを昨年100%にまで高め、世界初の手術も数多く発表し、胸腔鏡手術手技の開発や周術期患者QOLの改善をスローガンに、患者目線に立った研究や教育を行ってきました。今後はこうした思いを教室員と共有し、将来の外科学教科書を書き換えるようなエビデンス作りを目標に、自分の肉親でも任せられるような外科医を育てて行きたいと思っております。

本学に着任後、日本で初めての胸腔鏡手術教育制度規則を、本学ならびに関連病院の先生と共に作り上げました。同規則が技術認定医制度発足の引き金となり、その礎となってくれることを希望しております。今後とも、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



中西 良一 教授

次世代医療開発学分野 — 神谷 武 教授

この度、平成27年7月1日付けで、本学に新設されました次世代医療開発学の教授を拝命いたしました。私は昭和61年に名古屋市立大学を卒業後、旧第3内科に入局し内科一般研修を行いました。翌年、大学院入学と同時に岐阜県立多治見病院消化器科で消化器臨床研修を行い、大学院修了後は名市大で消化器内科医として臨床、研究、教育に従事してまいりました。

研究のメインテーマは胃食道逆流症、機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群など「機能性消化管障害」という消化器の中ではややマイナーな領域で、これまでその病態、治療に関係する内臓知覚、消化管運動、プロバイオティクスの基礎的研究と、新規治療法の開発を目指した臨床研究を行ってきました。内科の再編後は消化器代謝内科学に移動し、人事交流により医薬品医療機器総合機構(PMDA)で臨床試験、薬事行政について学ぶ機会もいただきました。

今後は消化器領域の研究に加え、PMDAでの経験をもとに治療評価学、臨床薬理学的研究にも着手し新分野の基盤構築をすすめ、さらに、臨床試験管理センターの運営を通じて、質の高い臨床研究を名市大から発信できるよう体制整備に努めたいと考えています。

今後とも皆様方のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



神谷 武 教授

02 時の人 People in the news

名誉教授のご紹介

細胞生化学分野 — 佐々木 實 名誉教授

佐々木實名誉教授は、昭和34年に本学医学部をご卒業になり、生化学教室の明石修三名誉教授に師事されました。明石先生のもとでは、酸性多糖類の糖鎖構造の決定と抗原構造の解析に携われ、その後たんぱく質分解酵素とその阻害物質に関する研究を開始されました。とりわけ、血漿に存在するたんぱく質分解酵素阻害剤の研究に目覚しい成果をあげられ、昭和55年に新設されました生化学第二講座の初代教授として就任されました。教授になられてからは、血漿中に存在するたんぱく質分解酵素の本体が、炎症を制御するキヌノーゲンと同一であることを証明するなど、世界的な研究業績をあげられました。その一方、教室員の教育にも腐心され、10名を超える教室員を指導し、日本全国に教授として輩出いたしました。さらに、平成7年からは本学医学部長として学部運営に携われ、大学および医学部の発展に大きな貢献を果たされました。これら長年に渡る研究・教育の御功績により、平成25年春めでたく瑞宝中綬章を綬章されました。現在は、生化学を離れながらも、新たに精神神経疾患などの病因解明に精力的に取り組まれております。今後も大所高所から本学医学部の発展にご助言いただけるものと信じております。

文責：細胞生化学 教授 中西 真



佐々木 實 名誉教授

OBのご紹介

ジャズミュージシャン — 浜崎 航 先生

早いものでもう卒業して10年経ちました。

同級生達は立派な中堅の医師として全国で活躍されています。僕が全国色んな所で演奏していると、そんな同級生達がちよくちよく顔を出してくれます。皆、立派な医師になったなあと思います。学生の際は頼り無げだった人も実に堂々としていて。

僕はというと相も変わらずジャズという音楽に取り組み続けていて、国内外で演奏しています。今年は5月にNYでニューアルバムを録音し、年内に発売予定です。今年は国内最大の東京ジャズでリーリトナーグループで演奏したり、私のグループで横浜ジャズプロムナード等のジャズフェスや全国のジャズクラブで演奏しています。

放送関係では来年放送予定のNHKスペシャル新映像の世紀でテナーサクソスを演奏しています。などなど詳しい活動はwatarujazz.comを是非ご覧になって下さい。

最近では演奏活動の合間を縫って長年の趣味のダイビングをしに離島に行っています。そのついでにボランティアコンサートや学校のブラスバンドの指導をしたりしています。

今年は屋久島の安房中学校でコンサート込みの特別授業をやりました。校長先生はじめ生徒さん皆様に大変喜んで頂きました。隠岐の西ノ島ではドクターコートを地で行くユニークなドクターと仲良くなったり。奄美大島ではボランティアコンサートをしたり。今後はこういった社会奉仕活動も盛んにやっていきたいと思っています。



浜崎 航 先生

リハビリテーション科

平成26年1月に名古屋市立大学医学部にリハビリテーション医学講座が開設されました。現在その立ち上げに全力を傾注しております。そして、本年4月には病院診療科としてリハビリテーション科が新設されました。今回、「瑞医」に寄稿する機会を与えていただきましたので、リハビリテーション(以下、リハ)医療の重要性、リハ医学講座の活動と今後の展開について述べていただきます。

リハビリテーションの重要性

我が国は、世界でも類を見ない超高齢社会に突入し、高齢化率は2060年に約40%に達すると見られております。こうした中、医療・介護保険など社会保障費も年々増加しており、ついには本年度より急性期医療から在宅へのスムーズな移行を促すべく、橋渡し役として回復期リハ病棟に加えて地域包括ケア病棟システムが導入されました。急性期型医療施設では疾病の診療に加えて、疾病に伴う機能・能力の障害にも対応する必要があり、急性期(亜急性期)リハが重要であることは論じるまでもありません。

一方、前述の回復期リハ病棟、地域包括ケア病棟システム、更には在宅を含めた介護保険の分野でもリハサービスはシステムの中核を担っております。こうした医療や介護分野にとどまらず、廃用症候群を招く主因として最近話題となっているロコモティブ症候群(運動器症候群;ロコモ)やサルコペニア、フレイルティ(虚弱)への対応にもリハは無くてはならない領域で、正に国民の医療・福祉、健康増進の中核としてリハのニーズはますます高まっております。

リハビリテーション専門医とは?

「リハ専門医 (physiatrist)」とは何か、どんな役割を担っているのかご存知でしょうか。「リハビリテーション (rehabilitation)」という言葉自体はほとんどの方に認知されていると思います。多くの方が思い描くリハのイメージは、療法士(理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)など)の指導の基に行なう訓練を通じて、患者さんが機能回復、社会・家庭復帰を遂げる場面であり、ここにリハ専門医を思い浮かべる人はほとんど無いでしょう。これ程に認知度の低いリハ専門医ですが、実際はとても重要な役割を担っているのです。リハ医療は、実に多くの専門職種スタッフが参加する協働的チーム医療で、リハ会議という全体会議を通じて患者さんの障害情報を把握、統合し、最適なゴール設定および再設定を重ねつつ、障害の克服、最良の機能回復やQOLを指向する診療部門です。その中で我々リハ専門医は、リハ医学的障害学を駆使して適切なリハ訓練・評価処方、リスク管理を行っております。一方では、リハチームのリーダーとして個々の患者さんに応じた方向性を指し示すとともに、電気生理学的評価、嚥下の評価や治療、ニューロイメージングや運動生理学的知見に基づいた最新のニューロリハ技術や運動療法の導入、痙縮緩和治療、ロボット技術の訓練への導入など、小児から成人まで対応できるリハ医療独自の診療の基礎づくりを進めております。更には最新の神経および運動生理学的知見を求めて基礎的、臨床的研究も行うべく構築中です。今後、講座スタッフが一丸となってこれら診療技術や研究を更に高めてゆく所存です。

文責：リハビリテーション医学 教授 和田 郁雄



リハビリテーション科部のスタッフの集合写真



ニューロリハビリテーションの一環としての経頭蓋直流電気刺激療法



運動生理学に基づく運動療法機器による訓練

学生生活

医学部6年生の学生生活を紹介します!

6年生の4月から6月は選択実習となっており、診療科や実習先の病院をひとりひとりが自由に選択できます。5年生で実習できなかった科を選択する人、より実践的な実習・手技ができる科や病院を選択する人、国家試験の苦手科目の科を選択する人など選択はさまざまですが、学生から評価の高い名市大の特徴的なカリキュラムのひとつとなっています。



勉強部屋の様子

7月にはプライマリケア実習と各科の最終講義があり、すべての実習と講義が終了しました。

この時期からは、8月に行われる各研修病院のマッチング試験、9月からの2か月にわたる卒業試験、2月に行われる3日間の国家試験に向けて本格的に勉強を始めます。例年6年生はグループごとに割り与えられた勉強部屋に別れて勉強をします。同じ目標をもった仲間と集中して勉強できる環境が用意されていることもまた名市大の大きな魅力となっています。学年全員が来年度晴れて医師としてのスタートが切れるよう頑張ります。

6年生代表 正木 祥太



集合写真(先生と後輩と共に)

第56回川澄祭【医心伝心～君と僕のかわすみらい～】が始まります 実行委員長のM4矢田 真宏さんにききました!

第56回川澄祭実行委員長を務めさせていただきます医学部4年の矢田真宏と申します。本年度の川澄祭は11月6日から3日間にわたり開催する運びとなりました。開催にあたり、数々のご支援を頂いた同窓会、先生方をはじめとする全ての方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本年度のテーマは、「医心伝心～君と僕のかわすみらい～」です。医療のことだけでなく、医療系学生である医・看護学部の学生の思い(医心)を多くの人に伝える。また学内の方や大学生同士だけでなく、あらゆる人との繋がりを慈しみ、更に広げていく。その繋がりを通じて今以上に川澄の未来を明るくものにしようという想いを込めています。

昨年度に引き続きステージ企画、模擬病院、ライブ、お化け屋敷などの人気企画もさらに改良を重ねるだけでなく、ドクターGなどの新しい企画を用意し、今まで以上に盛り上がりのある学祭を目指しています。

当日、皆様のご来場をお待ちしています。



第56回川澄祭実行委員長 医学部4年 矢田 真宏

ニューサウスウェールズ大学に留学してきました!

医学部では、毎年オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学(UNSW)へ交換留学生として2名を派遣しています。来年度からは留学枠が4名になります!

私たちはシドニーにあるニューサウスウェールズ大学に留学させて頂きました。実習を行ったのは、大学に隣接するプリンスオブウェールズ病院という所で、それぞれ、感染症内科と循環器内科でお世話になりました。私たちが共通して驚いたことは、オーストラリアの医師の約半数はGP(General Practitioner)という開業医として、地域の人々の総合的な診療や健康管理を担うという事です。残りはSpecialistとして、日本の専門医のように臓器別に特化し、GPでは治療が困難な患者に対応します。

いま、総合診療医を増やす動きがあり、内科の専門医制度も大きく変化し始めた日本としては、病診連携・地域医療のシステムが確立しているオーストラリアから見習うべき点はたくさんありそうです。

今回の実習で体験したことは夢のようで、想像していた以上の収穫があり、本当に貴重な4週間となりました。このような機会を頂いたことに感謝するとともに、学び得たことを必ず医師としての将来に活かしていきたいと思っています。医学部6年 岸田 巧・湯谷 仁美



実習を行ったPrince of Wales Hospital



感染症内科
優しくも厳しい恩師と



お世話になった循環器内科
レジストラと現地学生と

